



-第9話 -真面目なことは良きことかな？-

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

新年度の始まり。桜の花が、家の近所の小川の水面を埋め尽くし、「ああこれが花筏いうのか」と散歩の途中で立ち止まる。そんな西行法師のような心持ちで過ごしたい。でも、実際は目まぐるしい日々の中で、さて対人援助学マガジンの我が連載である。「人生は対応のバリエーション」の執筆に取りかからなければならない。9回目である。9回もよく続いたなあとプチ感慨である。だいたい、一編 5000 字平均として×9編で、45000 字。ちょっとしたショートエッセイじゃん。継続は力なりとはよく言ったものだが、この Web 誌の編集長である団さんなどは、為すこと為すこと継続されていて、ほんとに頭が下がる。いやしかし、為さないことは、外野は知りようがないわけで、団さんとて、為さないことはあるはずなどと負け惜しみのひとつも言いたくなる。しかし何を書こう。これから、どこに行こう。前回までの三回シリーズの私説岡田隆介論で燃え尽きた。我ながら、一人の臨床家について、私見、誤解、理解、妄想、憧憬をない混

ぜにして、どかんと書き綴れたことはよかった、がんばったと思う。誰も言わないから己に言う「ようやった、ケンジ！」

次何書こう、困った、困ったとジョッキ片手に居酒屋などで愚痴っていると、対人援助学マガジンでは、先輩執筆者である K 氏（なぜかイニシャル、なんかカッコいいし）から、「何にも書くもんがないってところから始めれば」とのお言葉をいただく。なんかそれで一気に楽になり書き始めた次第である。ちなみに K 氏からは、困ったときによく良いお言葉をいただくことが多い。不思議とずっと自分の選択肢のひとつに入ってくる。感謝である。次会ったときに、感謝の意を告げると、“オレ、そんなこと言うた？”と忘れていることもある。私も同様に、加齢である。華麗なる一族じゃん、なんてダジャレも加齢のなせる技であろう。

最近思うこと①

最近、研修やワークショップを主催する側から気づいたこと、気になることを書いて

てみようと思う。ありがたいことに、研修講師やワークショップを運営する側の一員として、お声がかかることが、この7、8年増えている。それは、公務員を少し前倒して退職して、大学の教員になってからである。大学の先生は、自分で社会との接点となる現場に身を投じることを奨励されているので、その一環であるが、ここも感謝である。わたしの提供できる研修やワークショップでのコンテンツを研修テーマ風に並べてみる。「K式検査を用いた発達相談」「児童虐待対応に役に立つ面接」「児童虐待対応に役に立つアセスメントの実際」「解決志向の面接」ぐらいであろうか。以上は、児童相談所が関わる児童福祉現場を中心にお願いされる研修テーマである。また、保育現場にもコンサルテーションという形でお邪魔する機会も増えている。行きがかり上、「障害児保育」や「発達に偏りのある子への対応」「難しい保護者への対応」といったこともやっている。こんなとこまで、手を広げていいんかい？ときどき不安になる。そこで、誰も言ってくれないので、自分で言うさ「いいんです！」

研修講師としては、最初の頃は緊張のため自分のことしか見えない。参加者の反応以前に、自分が用意していたことが、台詞としてうまく言えたかどうか気になる。自分が自分らしくパフォーマンスできたかが自分の査定ポイントになる。口ごもったりとか、次に何を言うかの空白があったりすると、研修終了後、一人反省会を延々と繰り返していた。少し場馴れしてくると、周りが見えてくる。こちらの話にいちいち相槌を打ってくれる人。満面の笑みでこちらを見つめてくれる人。こういう人を見つけると、

一気に安心する。なんだか、口の動きもスムーズになったように感じる。乗ってる状態である。こういう聴衆を一人でも二人でも会場のなかに見つけ出せるかというのも、上手く研修が進められるかのポイントかと思う。一点凝視したような、怖そうな表情で講師の顔を睨みつけている(ように見える)人もいる。気になる。ただ、その人が内容に不満を持っているとは、決めつけられない。ご本人の熱心さや真面目さが、表情に表れている場合もある。また、生まれつきの顔つきとか。あくまで確率の問題であろう。でも、その表情や態度による影響が、相互的に講師のパフォーマンスに関わってくるのも事実である。できるだけ、良き刺激を与えてくれる人を捉えながら、研修を進めることだと思う。しかしながら怖そうな表情、退屈そうな表情の人が視界に入ってきてしまう。最近は無理してがんばろうとはしないようにしてる。ただ、その悪い周波を送ってくる聴衆の表情に、笑顔のひとつでも浮かぼうものなら、心の中でガッツポーズをとってしまうのも私である。研修講師まだまだ修行中の身といえる。伸び代、サイコー！

最近思うこと②

真面目なことは、良きコトなのか？ここから研修講師ネタである。定例でやっているワークショップや、何度か引き受けている研修では、その場の雰囲気かわかっている安心感がある。参加する人も同様であろう。予定調和ばかりでは進歩はなかろうが、“何が起こるか毎回わかりませんわ”では身が持たない。もともと、吉本新喜劇的予定調和は好きである。そうしたホーム感あふれる研修シチュエーションではないとこ

ろのアウェイ研修で考えたことをお話したい。

まず、その研修の枠組みからお伝えする。依頼を受けたのは、公的な機関ではないが、それに準ずる機関であり、研修を請け負う役目を担っている機関である。もったいつけて話す必要はないのだが、こんな風に話していくと同じ業界の人には当該機関が、ばれてしまう。今回はこの機関がどうのこうのということではなく、そこにある種の研修動機をもって集まった人から私が感じたことを記したい。一定の権威とそれとセットの真面目さを纏った状況という比喻が当てはまると思う。あくまで、個人の感想であるが。そして、テーマは「虐待に関する事」である。普通、テーマは虐待と聞いて、ニコニコしたり、“むちゃ、面白そう！”とか、“興味ありあり！”などというリアクションをする人はいない。この対人援助学マガジンでもお伝えしてきたと勝手に思っている、私の相談面接における姿勢がある。それは、相談面接相手であるクライアントさん（呼び方は要支援者でも、ケースの方でもなんでもいいのであるが）の少しでも役に立つこと、クライアントが来談して、ちょっとマシになりましたと思ってもらえる変化や差異を、持ち帰ってもらえることである。だから、そのためにできることには、わり方貪欲である。現実の問題は、「虐待」であろうと「自殺」であろうと、「不登校」であろうと「ひきこもり」であろうと、「DV」であろうと「いじめ」であろうと、シビアなものである。特にその言葉だけを切り取るとそうなる。眉間にしわを寄せがちとなる。一種の社会儀礼的態度かもしれない。しかしながら、こうしたシビアな難問に対して、同様に

シビアに深刻に眉間にしわを寄せて、膝つき合わせて同業の志が知恵を絞ってもそう簡単に答えは出てこない。クライアントの困りごとに対して、セラピストとして真摯に向き合うことは、大事である。聴くことも大事である。これを「共感」と言ったりする。しかしながら、それがクライアントに伝わって初めて「共感」と呼んでもらえるのではなかろうか？

その研修会の参加人数は、50人～60人ぐらいであっただろうか。「虐待対応」がテーマではあるが前半はそのメカニズムについて、後半はその対応の工夫についてといったもので、時間的にはタイトであった。

一定の権威のある真面目な研修会場面において、テーマもシビアな困難事である「虐待」がテーマである。うまく行かないのはどういうメカニズムが働いているのか？相手の難しさだけでも、自分の対応の技量だけでもなく、その関係性をどう変えるかに着目しないと相手を責めることに終始したり、自分の魔術的な成長を望んだりしてしまう。そんなことを学んでもらうため、二人でペアになってのエクササイズを用いながら研修している。その研修会では、後半の部分で「対応のバリエーション勉強会」の方法を用いてみた（詳しくは、本誌「人生は対応のバリエーション」の第1話、2話をご覧ください）。「対応のバリエーション」を用いる場合、少なくとも時間が3時間はほしい。その研修会の後半部分だけでは、時間は足りていなかったように記憶している。詰めつめで行った。「対応のバリエーション勉強会」の前提となることは説明した。まずは、ロールプレイにトライしてみること、ケースの立場に立ってみるものの気づき、正解はな

いこと（正解がないわけではなかろうが、セラピスト側だけの正解を追い求めても仕方がないこと）、人のロールプレイを見ること、批判ではなくできていること参考になることを探す態度、等々。こうした視点を持って帰ってもらうためのロールプレイでもある。この研修会では、グループ（5人）で出されたケースについてグループ内で2人ないし3人で、ロールプレイをしていく。その間、ロールプレイをしていない人は、オブザーバーとなり、ロールプレイ終了後プレイヤーも含めて感想を言い合う。これを順次続け、皆がロールプレイを1度はするというのが、グループワークの流れである。参加者間のグループワークで終了でもよかったのだが、最後に各グループのケースの中から選ばれた1ケースに対して研修講師である私がデモロールをするという時間をとった。いつものお約束である。決して講師のお手本ロールを見せるというものではない。参加者だけにやらせておいて、講師は解説のみ高みの見物を決め込むというのでは、しっくりこない感があり、この流れはよく使う。ただ、いいわけではないが、もうほとんど10分かそこらしか時間は残っていなかったように思う。しかも、選ばれたケースは、お決まりの対決場面である。保護された子どもを取り返しに来た両親面接というやつである。参加者は、中堅どころ以上であり、自分たちが対応に苦慮しているケースを提出してくれている。背に腹は替えられないというか、実践や現場経験を踏んでいるからこそその悩みであり、そうしたケースへの対応を考えてもらえることは素晴らしいと思う。

その時私が考えたことは、こんな場面はどんな経験値の高いケースワーカーや、熟

練の心理士が対応しようとうまくいかないことが普通であろうということであった。うまくいかないことを共有しながら、必要以上に自分らを責めるのでもなく、同じく必要以上に親をモンスター視するのでもない、でもその対応の中からちょっとマシな実践を学ぶような経験をしてほしいということのみであった。これは、0か100か思考ではなく差異に意味を見つけれられる思考経験をしてほしいのである。

それでわたしがやったロールプレイであるが、プランニングテーマは「謝罪」である。目の前の怒り狂う人、娘をかえしてくれるまでは帰れないとすごむ人に対して、どうすればその矛先がちょっとでも違う方向に向かうかの実験的ロールプレイを企図した。そのためには一人では弱い。圧に潰される。そこでまずは相棒探しである。こうした選定には、私は才能ありと密かに思っている。こういう勘所がある。この時も、にこにこしたいいかにも人の好きそうな福祉司さんを探し出して、お願いした。時間もないので無理くりであった。彼は快く引き受けてくれ、打ち合わせもそこそこにロールプレイを開始した。打ち合わせは私が上司、彼が部下の担当ケースワーカーという役決めぐらいであった。私からの指示は「とにかく、二人で謝りましょう」ということだけだったと思う。非常にリアリティーの高い両親、理詰めでねちねちというよりは、オラオラ系で自分らの話を優先するタイプだったように思う。選ばれしロールプレイヤーなので、迫力はある。でも負けじと、急造の上司・部下コンビは、足並みの悪さをわざと見せながら、「とにかく謝ろう」というロールを一貫したように思う。うまく行ったとは思わない

し、ましてや正解でもない。ひとつ大事なことは「謝罪」したのは、不適切な養育に対して子どもの一時保護をしたという対応の判断についての「謝罪」ではない。こちらの対応に対して親御さんが怒ったり、悲しんだり、憤ったりしていることに対しての申し訳ないという気持ちの表明である。そのことを徹頭徹尾訴えるしかないと思ったからである。謝っといたらええやろうという意図でもない（少しはそれもあるが）。役人としてではなく、人としての常識的な反応を示してみようというトライである。

他にもプランは考えられたかもしれない。でも、やったこと自体に反省はない。相棒の彼も予想以上に健闘してくれた。私の目にまたもや狂いはなかった。しかし、聴衆の反応でひとつ残念だったのは、予想より笑いが少なかったことである。このドシリアスで、ド迫力の両親に、同じく紋切り型の役所型の対応など、少なくともこの研修の場面でやってみても仕方ないではないか。いや、やってもいいが、私たちのロールプレイを見て、笑いをもって反応してほしいということである。硬直した場面に対して、きちんとしたいつもの態度で、説明責任を果たす。でも、ここから導き出されるのは、相手のいつもの反応であることは言わずもがなである。ちょっと変えてみたくあれば、自分から。「硬直」には、「笑い」を、「シリアス」には「ユーモア」をもって対応することはときには大事である。

研修終了後のアンケートは予想通りであった。「先生のロールプレイでは、いつもの対応でないことにもトライしてみることの大事さを考えさせられました」という嬉しいご意見もあった。しかし、「あのロー

ルプレイは如何なものか？」「児相が誤ってしまっては元も子もないではないか！」「もっと実践で役に立つ面接対応を教えてほしい」という意見も多かった。自分の拙いロールプレイを脇において言わせていただけるなら、正直ちょっと残念な感想であり、反応であった。表題に戻る。真面目なことは、（それだけで）良いことなのだろうか？正確に言うと「虐待など誰が対応しても難しいジャンルの事柄に対して、真面目に（法律的にとか、公僕としてとかいう意味において）対応しておくだけでいいのだろうか？いいと思うなら、変化や解決を望むのはおこがましいのではないか？面白い、面白くないかなんてことを考えるのはおかしいことなのだろうか？ユーモアの力はどこにあるのだろうか？役人としてきちんとしておけば OK ならば、伝えるべきことを然るべく伝えてそれで終わりでも 100 点ではないか？虐待対応について頭や心を悩ます必要はない。そうではないと知っていても、そう思うってしまう経験の一端を今回は取り上げてみた。

今回の思いつきを糧として、次回に繋げたい。